

まちかど・ズームIN!

みなさんからの素敵な情報を待ってます!

堂々の歌いぶり 仙南長持唄大会



祝い歌で知られる宮城県の民謡「長持唄」の第17回仙南大会が3月11日、中央公民館で開かれました。白石市からの13人を含む仙南の各地域から愛好者77人が出場し、張りのある歌声を響かせました。会場には約600人の民謡ファンが詰めかけ、出場者の堂々とした歌いぶりに盛んな拍手を送っていました。優勝は柴田町の高橋輝雄さん、市内では佐久間務さん(小原)が4位入賞となりました。

自分の身は自分で守ろう 「護身術」を学ぶ



特別養護老人ホーム「えんじゅ」などを運営する社会福祉法人伯和会では、職員が毎朝、護身術の訓練をしています。護身術は、不法な暴力など万一のときのために自分の身を守るための技。1月末に白石警察署(生活安全課)の署員から指導を受けて以来、朝礼の際に護身術の訓練を行っています。この日も大声を出しながら、後から抱きつかれた場合などを想定して訓練をしていました。

文化講演会で八名信夫さん熱弁

第20回公民館まつりが3月2日から4日まで中央公民館で開かれ、芸能発表や作品展示など、公民館で生涯学習に取り組んだ人たちが1年間の成果を披露しました。文化講演会では、テレビCMでもおなじみの俳優・八名信夫さんが「悪役こそわが人生」と題して、42年間の俳優生活での体験をもとに、時折ユーモアを交えながら熱弁。特に、昨今の青少年問題については、「他人の子供でも声掛けすることが大切。悪いことをしたらしからなければならぬ」と強調されました。公民館まつりの即売コーナーの益金141,350円は、3月16日、社会福祉協議会へ寄付いたしました。



お年寄りと楽しくふれあう 越河小・感謝の会

越河小学校で2月17日、手作り特産品完成「感謝の会」が開かれました。これは、総合学習の時間を活用した学校農園での収穫・加工の際に、指導協力してもらった地域の人たちに感謝するために開いたもので、5年生児童23人が、お世話になったおじいさん、おばあさんを招待しました。お手玉、ペーゴマなどの伝承遊びを一緒に楽しんだあと、児童たちが農園で収穫したダイコンとサツマイモをもとに作った「たくあん」と「干し芋」を茶菓子にしながら楽しく懇談。最後にマッサージをしてあげて、感謝の意を表しました。

大盛況 公民館まつり



地域の伝承を残そう 大平第9子供会「だんごさし」



大平公民館で旧暦の小正月に当たる2月4日、子供とお年寄りがふれあいながら地域の伝承を残そうと、老人会と子供会の共催による「だんごさし」が開かれました。参加したのは、大平第9自治会の子供会と老人会(睦会)の約50人。子供たちはお年寄りの指導を受けながら、つきたてのもちを丸めてミズキの枝に刺しました。この後、もちが刺されたミズキは、白石警察署や消防署などに展示されました。



白石城が 絵はがきに

白石城など県南名所のイラスト入りはがきセット「宮城蔵王ふるさとめぐり」が、3月1日に発売されたことを記念して同日、古山俊彦越河郵便局長などが市役所を訪れ、絵はがきに使用された原画(複製)を川井市長に贈呈しました。手紙文化の普及と地域振興に貢献するため発売されたはがきの絵柄は、白石城、阿武隈ライン舟下り、一目千本桜などの5種類で、1セット350円。白石市など県南4市9町の郵便局などで発売されています。

利用者にとっても便利 益岡公園に屋外時計を設置

厄年を迎えた昭和35・36年生まれの白石中学校の同窓生たちから、市へ寄贈されていた屋外時計の除幕式が3月13日、時計が設置された益岡公園で行われました。高さ5mの上に設置されたのは、ソーラー式の両面時計で、子供たちが多く利用するコンビネーション遊具の近くに設置されました。



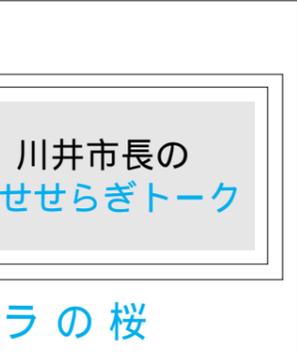
一月八日からオーストラリアを訪問した。シドニーから三百二十キロ西に人口二万四千

人ほどのカウラという市がある。ブルース・ミラー、カウラ

市長を公式訪問後、日本人戦没者墓地参拝。そして、東京都に

より寄贈された日本庭園と墓地を結び日豪友好の桜並木道に、

白石市として桜を寄贈するというのが私の訪問目的の一つであった。



第二次世界大戦中、カウラ市には捕虜収容所がおかれた。昭和十九年、この土地で日本人捕虜による暴動が起こり、脱走を企てた二百三十八人は全員射殺された。カウラ日本人戦没者墓地はこの時の死亡者二百三十八人と、戦時強制収容された日本人民間死亡者、合わせて五百二十二遺体を集めて建立された墓地である。

オーストラリアの人たちはどうして日本人捕虜が暴動を企て、脱走をはかったのか理解できなかった。欧米の文化では全力で戦い、力尽きて捕虜になることは名誉である。したがって、カウラのオーストラリア軍もこの日本人捕虜には尊敬の念を持ち、待遇、食事とも最高の処置を施していたという。

日本の敗戦で平和が戻ったものの、当時はオーストラリア全体に反日感情が渦巻いていた。そのような中、カウラから出征し帰還した豪州の在郷軍人たちは、人道的見地から自分たちのふるさとに眠る日本人

川井市長の せせらぎトーク カウラの桜

捕虜の墓地の清掃を行ったのである。このことから徐々に日本人捕虜に対する理解が生まれ、暴動の原因が日本の戦陣訓、つまり「生きて虜囚の辱めをうくる無かれ」という強制にあったことに気づいたのである。力尽きて捕虜になった日本兵はそのことに對しての恥と、自分が捕虜になることによってふるさと

の家族や一族の受ける辱めを考え、自殺的暴動に出たのである。カウラを脱走してどこに行くかというのか。西に行けば炎熱の砂漠。東に向かえば戦時体制を敷いているオーストラリア軍に銃殺されるだけである。その絶望の中でも、自ら死に至る道を選ばざるを得なかった日本人捕虜の哀れさを、カウラの人たちは墓地の清掃を繰り返した帰還兵たちの行動のうちから知ったのである。

そしてなお悲しいことがある。この墓地には無名戦士の墓がある。一部は他の場所で収容された本名の無名戦士であるが、実は、射殺された二百三十八人の捕虜の名前が全部偽

名であったということに由来するものである。日本人兵士たちは自らの身を恥しむと同時に、その災いがふるさとの一族に及ばないように全員偽名を名乗ったまま死んでいったのである。であるから、一人ひとりの墓に葬られた人たちの本名が分からない。その思いも込めて無名戦士の墓があるということである。

この悲話を知った元東京都知事鈴木俊一氏によって、日本人戦没者墓地から五キロ程離れたところに立派な日本庭園が建立された。そしてその間の五キロの道には、日豪文化交流協会理事長の戸倉勝禮氏が日豪友好を願って発案した桜並木道の建設が行われている。しかし、現段階で八百六十二本と目標である二千本への道のりはまだ遠い。桜の根本にはそれぞれの寄贈者名とその木を守るカウラ在住の児童名を記した真鍮板が設置される。この桜並木道が永遠に平和を訴え続けることを祈りたい。